

スロベニア話題集(ダイジェスト版)
～小さな国の大いなる魅力と日本との秘められた関係～

平成29年3月

I. スロベニアの魅力

1. 豊かな自然を有する小さなワイン大国

●スロベニアは、北部にアルプス（ジュリアン・アルプス）、南西部にアドリア海を抱き、山川湖、平野と海、カルストから鍾乳洞まで、多種多様な自然に富む国であり、関心とその日の天候に則して、溪流釣りやトレッキング、山岳登山や山歩き、スキーなどを楽しむことができる。スロベニアは対国土森林比率が国土の60.2%と高く、スウェーデン（75.6%）、フィンランド（71.8%）、エストニア（60.6%）に次ぎEU28カ国中4番目である。緑豊かな土壌と恵まれた環境により上質なワインやトリュフ、プロシュートなど質の高い農産物が生産されている。

●特にワインは、ブドウの独自品種が数多くあり、盛んな有機栽培やアンフォラワインなどを含め、多種多様なワイン造りが盛んである。棚田という棚田が完成域に達するほど念入りに作られており、土地の質という質毎に異なるワインが生まれている。なお、スロベニア国内には400以上のワイナリーがあるとされ、スロベニア第二の都市マリボルには、樹齢400年以上と、ギネスブックにも登録された世界最古のぶどうの木がある。



世界最古のワインぶどうの木

●日本へのワインの輸出としては、地中海沿岸に本拠を構えるヴィナコペル (Vinakoper) 社が対日輸出を模索している他、ワイン産地の一つであるブルダ地域のシュチュレク (Ščurek) 社やバティチ (Batič) 社などが長年対日輸出を展開している。また、北東部のマロフ (Marof) 社は、伊勢志摩サミットが開催された伊勢の著名牡蠣専門店で白ワインを提供し、対日輸出の好スタートをきった。

●2017年1月、スロベニア人女性シェフのアナ・ロシュ氏が英国の料理ポータルサイト The World's 50 Best Restaurants により、「世界一の女性シェフ」に選出された。同氏はスロベニア西部の街であるコバリドにレストランを構えており、スロベニア料理の知名度向上に貢献したことが評価された。

2. 小さなスポーツ大国スロベニア

●スロベニアは、スキー、サッカー、アイスホッケー、ハンドボール、バスケットボールなどが盛んなスポーツ大国である。2016年のリオ五輪には60人の選手を派遣し、柔道女子63キロ級のティナ・トゥルステニャク選手の金メダルをはじめ、同じく女子柔道で銅、セーリング及びカヌーで銀の計4個のメダルを獲得し、一人あたりのメダル獲得数において第7位（欧州諸国では3位）となった。また、トゥルステニャク選手は、2012年ロンドン五輪の柔



金メダルを獲得したトゥルステニャク選手

道女子63キロ級で金メダルを獲得したウルシュカ・ジョルニル選手に続き、国内の年間優秀アスリートに贈られる「スロベニアスポーツ大賞」を受賞した。なお、スロベニア柔道ナショナルチームU17（ユースチーム）は、かつて、国際武道大学で合宿・合同稽古を経験しており、我が国の高校や中学レベルでも、スロベニアとの柔道交流は活発である。

●過去には、1964年東京オリンピックの体操（鞍馬）でミロスラウ・ツェラル選手（スロベニア現首相の父親）が、金メダルを獲得し、現在はスロベニア・日本ビジネス協会で東京オリンピックに向けた両国間ビジネス展開に参加している。

3. 知られざるハイテク国家スロベニア

●スロベニアはハプスブルグ帝国の一部であった時代から高い技術力で知られ、旧ユーゴスラビア内でも先進工業地帯として発展した。スロベニアは小国なため、全ての分野で強い技術力を有している訳ではないが、IT産業、ロボット産業、自動車関連部品、小型飛行機等の隙間産業の分野で国際的にも競争力を有する革新的な技術力を持った企業が複数存在する。例えば、これまでに約1300機の小型航空機を85カ国に輸出してきた「ピピストレル(Pipistrel)」社は、実用レベルでは世界で初めて電動飛行機の開発に成功し、米航空宇宙局(NASA)から表彰され、2015年10月にインド国防省との間で超軽量飛行機194機を受注する契約を締結した。また、レーシング車（オートバイ及び車）用排気システム製造会社である「アクラポヴィッチ(Akrapovic)」社は、80カ国の市場に製品を輸出しており、日本の代表的なオートバイ製造メーカーであるヤマハ、スズキ及びホンダの公式レーシングチームも同社の排気システムを採用している。なお、ピピストレル社は、マーケティングのため日本を視察予定。



ピピストレル社の2人乗り電機飛行機「Taurus」



アクラポヴィッチ社の日産「GTR」用排気システム

4. リピッツァの白馬

●ウィーンのハプスブルク王宮内の「スペイン乗馬学校」において白馬の馬術ショーが観光客の人気を集めているが、元々、その白馬（リピッツァーナ種）の産地はハプスブルク帝国の現スロベニア領内にあった。ハプスブルク家は軍用馬の開発に取り組んでいる過程において、統治下のスペインからアラブ種であるアンダルシア馬を取り寄せ、地元のカルスト馬と掛け合わせ、地名に因んでこの牧場に育つ馬をリピッツァーナと呼び、18世紀半ば頃まで重宝した。白く美しい毛並み



が特徴のこの馬は、二度の大戦中の疎開を経て、現在ではオーストリアで飼育されているが、原産地リピツァでも牧場が残され、当時の技術が大事に伝えられている。

5. 小説・映画の舞台となったソチャ川

●スロベニア西部とイタリア北東部を流れるソチャ(Soča)川は、その流れ全域で見られるエメラルドグリーン色から、「エメラルドの美しさ」「自然の宝石」と称され、カヤックやラフティングに加え、欧州でも一級の渓流釣りの聖地として知られている。第一次世界大戦ではイタリア軍とオーストリア＝ハンガリー軍が激しい戦闘を繰り広げたことから、ヘミングウェイの小説『武器よさらば』の舞台となった他、2008年のディズニー映画『ナルニア国物語第二章』の撮影場所としても知られている。上流部は、アドリア海河川の固有種マーブルトラウトの生息地だが、現在は絶滅の危機に瀕している。



6. スロベニア出身のファースト・レディー

●2017年1月のトランプ大統領の就任により、スロベニア出身のメラニア・トランプ夫人がファースト・レディーとなった。メラニア夫人はスロベニア南部の小さな町であるセヴニツァの生まれで、180cmの長身を生かして16歳からモデルとして活動し、18歳でミラノのモデル事務所と契約、1996年からは活動の拠点をアメリカに移し、その後2005年にトランプ氏と結婚した。メラニア夫人の存在がスロベニアの国際的な知名度を上げると期待されており、トランプ大統領の選挙戦への出馬以降、実際にアメリカからスロベニアへの旅行者数が20%以上増加し、「メラニア効果」と言われている。



II. 日本との関係

1. 皇族が寄せるご関心とブレッド湖畔の手植えの桜・カルストと鍾乳洞

●スロベニア北西部に位置するブレッド湖は、日本で「アルプスの瞳」と称されるこの国最大の湖である。四季を通じて観光客でにぎわい、自然保護度の高いポーヒン湖と並び、魅力的な避暑地となっている。2013年には秋篠宮同妃両殿下がブレッド湖を御訪問された際、ブレッド湖市庁舎前で桜の植樹をされ、今では着実に育ち花を咲かせている。

●我が国皇室とスロベニアの関係では、1976年に天皇皇后両陛下が皇太子同妃両殿下当時、旧ユーゴ内各共和国を歴訪された際、最後に訪れたのがスロベニアであり、2000年には清子内親王殿下(当時)が「(財)日本さくらの会」寄贈の桜をリュブリャナ大学生物学研究所に植樹された。



ブレッド湖と湖上の教会

●スロベニア南西部にはカルスト地形が広がっており、この「カルスト」はスロベニアの地名であるクラス（Kras）が語源である。この地形はブドウ栽培に適しており、栄養



度の高いブドウ耕作地となっている。現在、この地帯では6千以上の鍾乳洞が発見され、なかでもポストイナ鍾乳洞は総延長23km、最大深度115mもありヨーロッパ最大級を誇り、日本人観光客にも大変人気がある。同鍾乳洞内には、目の退化した珍しい両生類プロテウス・アンギヌス（邦名：ホライモリ）が生息しており、独立後は、清子内親王殿下（2000年、当時）や秋篠宮同妃両殿下（2013年）も御視察になった。また、別のシュコツィアン鍾乳洞は1986年にユネスコの世界遺産に指定されている。

2. 日本からスロベニアへの旅行者と ANA 夏季チャーター便の到着

●2016年にスロベニアを訪れた日本人は、スロベニア観光庁調べによると、到着人数29,219人（対前年比マイナス19%、全外国人観光客到着人数の1.0%）、延べ宿泊人数45,805人（対前年比マイナス17%、全外国人観光客宿泊人数の0.6%）。何よりも最近富みに魅力を増しているのは、「安全さ」である。一般犯罪が少ないこともあるが、テロの脅威は極めて低い水準とされている。

●2008年以降、JTBが中心となりチャーター便を利用した「スロベニアとクロアチア」商品を毎年販売している。2016年8月にも、JTB他と全日空によるチャーター便6便が毎週土曜日に就航し、日本からは4名のジャーナリストが同行してスロベニア探求の観光取材旅行を行った。2017年は2便が就航予定。

3. スロベニアにおける武道、茶道と華道の普及

●旧ユーゴ時代から、日本の武道が紹介され、先駆的な武道関係者の普及努力を受け、柔道、空手、合気道などが普及した。独立後も、こうした関係者の長年の蓄積を踏まえ、多様な流派の武道クラブが活躍している。スロベニアにおける剣道としては、スロベニア剣道連盟が1999年に本格的な活動を開始し、2003年8月にはスロベニアで最初の「国際剣道セミナー」を催し、2010年には第二回国際剣道セミナーと「第一回サムライカップ」を合わせて開催した。現在、スロベニアの剣道家人口は約50人であり、連盟に所属する道場（クラブ）は5カ所である。2014年3月及び2017年3月には全日本剣道連盟より剣道具が寄贈されている。スロベニアにおける空手の歴史は40年を超え、スロベニア空手協会には63団体、約1500名の空手家が所属し、空手人口は6千名ほどとされている。2014年3月には、ラシュコ市において「空手世界カップ」が開催され、当時のブラトウシェク首相も出席し、世界40カ国から約350名の空手家が参加した。合気道では、スロベニア正道館代表であるマテアジュ・ドブラベッツ氏がスロベニア国内に道場を6カ所有



合気道連盟冬季講習（於：プラニツァ市）

し、約100名の会員に合気道を教えている。なお、ベルヴァル上院議長も最近合気道を開始。また、弓道も活発であり、1979年から黒須憲東北学院大学教授がスロベニア他で弓道セミナー講師を務めている。

●我が国を代表する文化の柱である茶道と華道も、徐々に広がりを見せている。2006年9月、パウラ・ブラガ・シメンツ女史を講師に迎え、リュブリャナ市内にある民俗学博物館にて裏千家の茶道教室が初めて開講された。その後、2014年より裏千家淡交会東京支部茶道教授・村上由美子氏らが年3回スロベニアを訪問し、茶道教室での指導を行い普及に務めた。そうした積み重ねを背景に、2016年6月には裏千家淡交会スロベニア協会が正式に設立されることとなり、千玄室大宗匠がスロベニアに來訪され、発会式他の一連の設立記念行事を開催した。華道・池坊イタリア支部で生け花を学んでいたスロベニア人男性華道家・ミロスラウ・ガヴラン氏の依頼を受け、池坊華督・目崎真弓氏が、2011年頃より、コペル市を訪問し、華道の稽古を実施している。2016年1月23日には、スロベニア華道協会が設立され、同協会代表にガヴラン氏が就任した。



茶道デモンストレーションの様子

4. 日本との大学・学術・研究交流

●スロベニアとの先端技術研究における交流は深く、高エネルギー加速器研究機構（KEK）にリュブリャナ大学やノヴァ・ゴリツァ大学などから10人を超える研究者が派遣されており、500名超の研究者が参加する国際共同プロジェクトである同機関での Belle II 実験には、スロベニア政府より財政支援が行われている。

●最近のスロベニア人留学生受入数は年間20名強、日本人留学生の派遣数は30～40名程度であるほか、双方で約200名の研究者の交流がある。また、スロベニアの4つ国公立大学（リュブリャナ大学、マリボル大学、ノヴァ・ゴリツァ大学、プリモルスカ大学）等とは、日本の大学22校が大学間交流協定を締結している。人文系では、リュブリャナ大学文学部アジア研究学科にある日本語・日本研究コースや社会科学系を中心に、筑波大学をはじめとする大学との間で交流がある。また新たに、同志社大学も大学間交流協定締結を視野に入れ、リュブリャナ大学社会科学部と実質的な交流活動（同志社大学大学院博士課程の学生によるフィールドワーク）を開始しており、大学間交流プログラムの実施や両国における学術会議開催を検討しているほか、山梨大学もリュブリャナ大学医学部と先端臨床医学分野における協力を模索している。他方、マリボル大学、ノヴァ・ゴリツァ大学、プリモルスカ大学では、自然科学系分野における研究者間の交流が軸になっており、特にノヴァ・ゴリツァ大学にはワイン研究所があるため、山梨大学附属ワイン科学研究センターが協力を模索している。



同志社大学学生に対する講義(リュブリャナ大学)

5. 日本語を学ぶスロベニア人とモダンアートを通じた交流

●スロベニアの外国語能力は極めて高く、旧ユーゴの時代からロシア語と並んで英語教育に力をいれてきたことから、特に50歳以下の人達の英語能力は特筆ものである。日本語教育に関しては、筑波大学で研究し日本との関係が深いアンドレイ・ベケシュ・リュブリャナ大学教授（2016年12月で退官）が1995年に同大学文学部に日本研究講座を開設し、現在約170名が日本語、日本学を学んでいる。同講座卒業生の一人であるマヤ・ペシエル女史が「Genki Center」という日本に関する文化広報活動を主とする団体を立ち上げ、大使館とも協力して毎年「Japan Day」を開催し、多くの市民の関心に応えている。



Japan Dayの様子

●スロベニアの著名な芸術家のアンドレイ・イエメツ氏と四国高松市に拠点を置く濱野年宏画伯（2016年7月に外務大臣表彰）は、旧ユーゴ時代から長年にわたりモダンアートを通じた交流を行っている。2017年9月には、スロベニア北西部のクランにてモダンアート展を共同開催予定。

6. 葛西選手の高い知名度とスキーを通じた交流

●スポーツの中でもスキーは特に著名で、人口約200万人のうち、およそ1/3の国民がスキーを楽しんでいる。葛西紀明選手はスロベニア人の間で圧倒的な人気を誇り、日本への嘆賞と関心の源泉でもある。世界的に有名なスキー板メーカーであるエラン(Elan)社はスロベニア企業であり、女子スキージャンパーの高梨沙羅選手もエランのスキー板を使用している（注：エラン社は2016年4月にスキージャンプ事業から撤退。スロベニアのスラットナー・カーボン(Slatnar Carbon)社が同事業の引継を発表）。2015～2016年のスキージャンプW杯シーズンでは、女子ではこの高梨選手が、また男子ではスロベニアで有名な若手ペテル・プレウツ選手が優勝している。



エランのスキー板で滑空する高梨沙羅選手

●上記のスラットナー・カーボン社は、2017年2月に日本でスラットナー・アジア(Slatnar Asia)社を設立し、アルペン・スキーの販売を中心に日本及びアジア市場への展開を進めている

●アルペン・スキーで旧ユーゴスラビア初となる銀メダルを獲得（1984年サラエボ冬季オリンピック）したユーリ・フランコ選手（2014年10月に外務大臣表彰）は、1985年に現役を引退した後、新潟県を頻繁に訪問または居住して子供スキーヤーの指導にあたり、1998年長野オリンピックなどで活躍した皆川賢太郎、池田和子、山川純子などのスキー選手を輩出した。同氏は、日本滞在中に高円宮同妃両殿下とスキーを通じた交流を行っており、当時幼少であった高円宮家女王にもスキーを教えている。

フランコ氏は、2002年以降、活動の場をスロベニアに戻し、企業家として欧州地域を中心に活躍しており、今もスロベニア・日本ビジネス協会の要の一人である。

7. 姉妹都市関係

●新潟県新井市（2005年以降、妙高市）は、アルペン・スキー銀メダリストのユーリ・フランコ氏の働きかけにより、1996年、新井リゾート（株）と共同で開催した国際交流イベント「スロベニア・ウィーク」をきっかけとして、北東部のオーストリア国境に近いスロベン・グラデッツ市と交流を開始し、2001年9月に新井市で姉妹都市協定調印式を行った。最近では、2011年に10年間の交流を綴った記念誌を出版し、2014年9月には妙高市からの訪問団が来訪し、交流と意見交換を深めた。翌年2015年9月にはスロベン・グラデッツ市の高校生訪問団が妙高市を往訪し、高校生を含む一般市民との交流を実施した。2016年10月には、入村明・妙高市長がスロベン・グラデッツ市を訪問した。

●また、正式な姉妹都市関係ではないが、熊本県水俣市とイドリア市、秋田県男鹿市とプトウイ市の間で交流がある。イドリア市は水銀鉱山のある町として知られ、旧市街や鉱山跡地はユネスコ世界遺産に指定されている。他方、プトウイ市は春先に開催されるクレント（秋田県の「なまはげ」に近似）のカーニバル開催地として有名であり、男鹿市からも参加したこともある。

8. 東日本大震災～小さな国スロベニアからの大きな支援～

●東日本大震災に際し、スロベニア政府から日本政府に対し義援金15万ユーロが贈られた。またスロベニアのプレハブメーカー「TRIMO」社は宮城県南三陸町にユニットハウスを寄贈し、集会所として利用されている。このほか、スロベニアフィルハーモニーによるチャリティコンサート、各地の小学校児童による千羽鶴の寄贈、ボランティア団体による献花や蠟燭点灯などの被災者追悼イベント等が行われた。

●また、前述のユーリ・フランコ氏も震災後、東北地方の復興支援活動に精力的に協力し、スロベニアにおける義援金集めに尽力した。2016年6月には、長年、スロベニアとの文化・ビジネス関係推進に貢献している森雪雄ザリア会長（元在日スロベニア名誉領事）と協力して、追悼のためのコンサートをブレッド城で開催し、日本人ジャズ・ヴァイオリニスト牧山純子氏が同氏の新曲「スロベニア組曲」を披露した。

9. そば文化を始めとする豊かな食文化を通じた日本との交流

●小麦が育ち難い土壌のスロベニアでは、長らくそばの栽培が発達し、餃子風、そばがき風、そばパスタなど多様な食べ方がある。2013年8月には、スロベニア北東部のラシュコ市において、第12回国際そばシンポジウムが開催された。同シンポジウムは、イワン・クレフト氏（現リュブリャナ大学バイオテクノロジー学部教授）の提唱により1980年に初めてスロベニアで開催され、日本でも過去2回（長野県、宮崎県）開催されている。2016年10月には、江戸ソバリエ協会主催の特別セミナーにてクレフト教授が講演を行った。2017年には蕎麦職人・松本行雄氏率いる蕎麦打ち団体がスロベニアを訪問予定。